



ふわりとひかる 《百合系小説》



ふありの書斎

2024年5月24日 18:36

わたしは彼女の言葉に、たまらず席を立ち上がり教室を出た。
(違う...違う...彼女の言葉は嘘だ)
だって、彼女は世界的に認められているアーティストだ。
そんな凄い人が...、あんな事言うわけない。言ったとしても冗談で、本気なわけない。

わたしは、予鈴が鳴っているにも関わらず、一人になりたくて廊下の両端に設けられた、非常階段まで走り、ドアノブを回した。

ガチャ.....

扉が開き、わたしは外に出て、扉を閉める。鉄筋コンクリート製の、階段の踊り場にしゃがみ込み、
なぎさ
渚ひかるの言葉を頭から叩き出そうと、必死になった。

わたし達女の子だよ。

なのに何でそんなこと言うの？

『可愛い』だなんて。

ケージに閉じ込められた小動物を、可愛い...と無邪気に言うみたいに。

言葉になんの責任も感じさせない褒め言葉。

最低。

ひかるが憎いのに、なのに...嫌いになりきれないのだろう。

答えは分かっている。

わたしが、ひかるが好きだから。

可愛い...なんて言われる前から、ずっとずっとひかるを想っていた。

恋愛対象というより、憧れ、羨望。

パブロ・ピカソの描く人物画より、ひかるの描く人物画は眸^{ひとみ}が、生き生きとして、クリスタルガラスより透明感があって、美しかった。

ただの憧れでいたかった。

それで十分だったのに、境界線の有刺鉄線を越えてしまった自分への罰だ。

「あああああっ！！」

こんな苦しみから解放されたくて...一層ここから飛び降りてしまおうか。塀の前に立ち、手すりにつかまる。

そのまま重心を前に傾けて...

その時、非常階段の扉が開き、誰かが『ふわり！』と、呼んだ。

恐る恐る振り返ると、そこには美しい佇まいの...

「...ひかる」

が、いた。

トントントンと軽やかなステップで踊り場まで降りてくると、ひかるは整った表情をしかめて、わたしに手を伸ばす。わたしは、反射的にギュッと眸^めを閉じて、耳に両手を当てる。

「ふわり、さっきはゴメン。でもさ、死ぬのは許さない。教室、戻ろ」

「嫌っ！」

わたしは、ひかるの手をはねのけ、再び階段を上がると、廊下を駆け抜け、普段は立ち入らない旧校舎へ向かった。

ひかるは最近海外から編入してきた生徒で、旧校舎は未知の存在だ、捕まらないで済む。

「あーあ。結局、授業サボっちゃった」

ひかるは後頭部をワシワシ掻いて、

「旧校舎かぁ...」

と、不敵に笑む。渡り廊下に、足を踏み込んだひかるは、口元に手を当て、くすくす笑う。

「やっぱりどこか抜けてんな、あの子」

と呟くと、迷うことなく鼻歌交じりに目的地へ向かう。

「ハアハアハア.....」

旧校舎は、天井から蜘蛛の巣が、いくつも垂れ下がり、ホコリが、廊下の壁も、床も真っ白に積もっていた。

「...あっ！きゃっ！」

ホコリの、山に足元をすくわれて、ドサッと尻餅をつく。下履きのつま先に引っかかったのは、ホコリを被ったベンケースだった。年月の経過を表すように、だいぶくたびれて見えた。

「もお...」

わたしはやるせない気持ちを、何処にぶつけたらいいか分からず、これはみんなひかるが悪いのだと、難癖をつけてしまう。

ーその時、コツツと足音らしきものが聴こえてきた。

なに？

誰の足音？

まさか、ひかるが後を追いかけているのでは？と、背筋に震えが走った。

瞬間、わたしはすぐ近くの教室に飛び込み、どこか隠れる場所はないか、視線を走らせる。自分の身体を両腕で掻き抱き、平静さを取り戻すと、ハッと隠れ場所を見つけた。

「ふわり、出ておいで～。こんなホコリまみれの校舎、身体に毒だよ～」

言っている内容はマトモなのだが、どこか愉しんでいるふしがある。

「先生呼んだほうがいいかな、授業サボって旧校舎でかくれんぼ、しているって」

ひかるは頭の後ろで腕を組み、スタスタ迷うことなく、わたしの隠れ場所に確実に近づいている。

「ふ～わ～り～」

「ふわふわふわ～り～」

まるで、鬼ごっこをしているように、愉快地笑うひかる。

ガラガラガラ * * * * *

2年2組のプレートが、壁に押し込まれた部屋に入ると、ひかるはピタッと足を止める。

「はぁ～こりゃまた随分ホコリまみれの部屋を選んだね」

ひかるの声に、わたしの手のひらがじっとりと汗ばむ。

わたしは無言を通して、口元を抑えた。

「あのさ～ふわりのこと、可愛って思ったのはマジだったんだよね。女に褒められて...気持ち悪かった？だったら謝るけどさ...もし冗談にとられたら...笑えないよ」

ひかるは、教室の清掃道具の扉を開ける。

「...こんな汚いトコに居るわけ無いか」

と、ひとり^{ひと}言^ごちパタンと扉を閉める。

それから、生徒の座席を屈んでは確かめ、収穫なしと思うと、ハアとため息をつく。

教壇の、教卓の下にも居ない。ひかるは、チツと軽い舌打ちをして、教卓の上にスラッと華麗に飛び乗る。そして、足をプラプラさせながら、

「...一目惚れ、だったんだよね。あたしは、絵を描くために、色んな国を旅しているから、いちいちその国の風習とか、恋愛感覚とか覚えられなくて...でも...」

強い日射しが差し込む大きな窓を見つめ、

「男だとか、女だとか関係なく、対人間として本能のままに恋してた」

凛とした口調にキシッと音がする。

「あたしは...ふわりを1人間として愛してる」

それから暫く無言になった。

「はっ。まあそういうことだから、少しでもあたしの気持ちを汲み取ってくれたら、嬉しいんだけど...。やっぱ日本では難しいのかな？」

ホコリの教室は一瞬しんと、静まり返り、やがて、ひかるがポツリと呟く。

「じゃあ、次の授業までに適当に時間潰すわ。...それと、あんまりホコリまみれの、遮光カーテンに隠れていても、汚れるだけだよ」

ひかるが、面白そうに苦笑すると、スルスル～っと窓の端に寄せられたカーテンから、わたしは^{ひとみ}眸に涙を浮かべて、なんだか今にも気絶するのではないかという、この良く分からない想いが、爆発しないように、胸元を両手で抑え、ひかるの前に、やや俯きながら立つ。

「おはよう、ホコリの国のお姫様」

ニヤリと笑みを浮かべて、ひかるがあたしの頭を撫でる。

「最初から気づいていたの？わたしがここに隠れているって？」

「まあね。外から、ふわりが一生懸命カーテンの中に収まろうとしている姿が見えたからね...ちょっとマヌケに見えて笑った」

そう言って思い出し笑いをするひかるに向けて、厳しい表情をするわたしは、よっ、と教卓から飛び降り、グーッと伸びをするひかるのそばに、少しずつ少しずつ、近寄り、その首にピタッと両手を回し、

「...わたしも、ひかるが好き。大好き」

まるで、小鳥の^{さえず}囀りのように、ひかるの^{ささや}耳元に囁いた。

ご拝読有難うございました。

文 ふありの書斎

イラスト 月猫ゆめや様

※この作品はnoteのクリエイター同士のコラボ作品となっています。
発案&文章をふありが担当し、絵師の月猫ゆめや様が、イラストを描いて下さいました。

月猫様、わたしの無理難題なリクエストに親切に応じて下さり、感謝の念に耐えません。
本当に有難うございました。
また、再びコラボ作品が実現するのを心より願っています。お世話になりました。

そして、読者の皆さま。
この作品はジャンル分けすると、百合に値します。主人公のふわり...彼女の名前とわたしの名前は一字違いで、混乱された方も居るのでは？と思い、敢えてここで注意書きします。この作品の主人公ふわりは、わたしではありません。わたしの想像上のキャラクターです。語弊を招いたらごめんなさい。

それでは、次の作品で、お会いしましょう。

ふありの書斎